早産の病理学的研究

広島大学原爆放射能医学研究所
遺伝学・優生学部門　岡本直正
佐藤幸男
日高惟登
秋本尚孝
宮原晋一

その1. 資料の解析

我々は病理解剖材料をもとに流早死産の原因解析を行っている。肺の発育異常，浸軟児（子宮内死亡），胎児脳の発育と異常及び腎奇形（多発性嚢胞腎，腎無発生及び発育不全症），と流早死産とについて既に報告した。今回，早産について，その資料の解析及び死産との比較検討について報告する。流早死産の定義は各研究者によってその名称内容が異なり混乱を生じている。我々は既に名称内容統一の必要性を強調し，奇形学的立場からの定義を報告した。即ち，流産は受精から胎令１６週まで，早産は胎令１７週から３６週まで，死産は胎令３７週以降。又，早産は胎令１７週から２８週までの早期早産と胎令２９週から３６週までの晩期早産とに区別した。

１９４６年以降蒐集・剖検された約９０００例のヒト胎児ならびに新生児屍の剖検記録，組織学的所見，家族歴，妊娠歴，分娩歴等の資料を電算機で処理し，解析可能な資料を有する５９７３例の所見を基に検討が行なわれた。

早産は３４５例で全検査例数の5.8％で，病的所見を有するものが３０５例で全早産例数の８８％強を占めている。男女比（男／女）は早産では1.07，全検査例では1.15で女性に多くみられる。又胎令５～７カ月（早期早産）６８例は全早産例数の１９.7％，全検査例数のそれの2.0％で，胎令８～９カ月（晩期早産）２７７例は全早産例数のそれの２8.8％で胎令８～９カ月に多くみられる。

母体側の異常は，妊娠中毒１４例(２8.0％）が最も多く，次いで感染１２例（２4.0％），羊水過多７例（１4.0％），心不全６例（１2.0％）の順にみられる。

早産児では，病的所見は出血２５１例（２8.4％）が最も多く，次いでうっ血１３１例（１4.8％），肺炎７１例（8.1％），心異常７０例（7.9％）の順にみられ，奇形は心・大血管系７９例（３5.5％）が最も多く，次いで泌尿生殖３５例（１5.8％），中枢顔面２９例（１3.1％）の順にみられる。死因は未熟９８例（３6.3％）が最も多く，次いで感染５４例（２1.1％），分娩外傷３３例（１3.9％），奇形２９例（１1.3％）の順に見られるが，胎令８カ月以降では奇形の増加が目立ち，奇形の早産に対する何らかの役割が示唆される。

その2. 死産との比較検討

早産の成因解明に関する研究に胎生病理学的な立場から寄与する方法として，早産児の剖検所見，母体の妊娠歴及び分娩歴等から，その所見の由来する原因を追求する一方，生存して娩出された早産児と死亡娩出された死産児の剖検所見及び母体側の異常所見等と比較検討する事によって早産のの成因についての手掛りをつかむ試みがなされた。得られた結果の概要は，正常，奇形及び病的所見を有する症例などの剖検診断別による比較では早産の８～９カ月令で奇形と共に病的所見を示す症例も増加している。一方，児の死因については，その項目別で比較すると早産では未熟，感染が多いが死産では分娩外傷，奇形及び無酸等が多い。更に各々の死因を月令の推移によって区分けすると早産群では８～９カ月令で奇形，感染が上昇し，無酸及び未熟が減少しているが死産例では，分娩

外傷，無酸が上昇をみている。これらの所見は一般に早産児の死因としては，未熟，感染，死産の原因としては奇形，無酸が多い事を示しているが特に８～９カ月令の早産例において奇形が増加するのは，死産例にはみられない点であり奇形が早産の誘因と，その死因に役割を演じている事を示唆している。早産及び死産にみられた奇形の内容は多岐にわたり，何れも心大血管系，中枢・顔面，泌尿生殖器系等に多くみられ，その合併奇形延べ数は早産３４５症例中２２２，死産８６６例中５２０で，各々の群の１個当りの奇形数平均は0.6と等しい。これらの奇形発現率を臓器別毎に胎令を追うてみると早産では８～９カ月令で何れの臓器の奇形も増加を示しているが臓器間における奇形出現頻度の差はみられない。この所見は奇形が早産の後半期において，その発症要因に重要な役割を果たしているが奇形の種類による特異性は有していない事を示唆している。児の病的所見の内容については，両群に臓器の点状出血，うっ血等が多くみられ，これらは早産及び死産の結果に由来する病的所見と解されたが，１個体当りの病的所見数は早産 2.9 で死産 1.8 を上廻っていた。

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

その1.資料の解析

我々は病理解剖材料をもとに流早死産の原因解析を行っている。肺の発育異常,浸軟児(子宮内死亡),胎児脳の発育と異常及び腎奇形(多　発　性　.腎無発生及び発育不全症),と流早死産とについて既に報告した。今回,早産について,その資料の解析及び死産との比較検討について報告する。流早死産の定義は各研究者によってその各称内容が異なり混乱を生じている。